

日本地球化学会 2010 年度第 3 回評議員会議事録

日時：9月6日 12時10分～17時30分

場所：立正大学熊谷キャンパス

地球環境科学部（3号館）1F

出席：海老原会長，吉田副会長および鍵，川口，下田，鈴木，高橋，瀧上，谷水，中井，西尾，野尻，松枝，松本，丸岡，山本，三澤評議員

欠席：松久監事，佐野 GJ 編集委員長，川幡，橘，谷本，平野，山中評議員

オブザーバー：大隅会員

1. 審議事項

(1) 2009年度事業報告(案)・2010年度事業中間報告(案)・2011年度事業計画(案)が庶務幹事および会計幹事から提示され，修正ののち承認された。

(2) 2009年度決算報告(案)・2010年度会計中間報告(案)・2011年度予算(案)が庶務幹事および会計幹事から提示され，修正ののち承認された。

(3) 2010年度総会議事次第(案)が庶務幹事から提示され，承認された。

(4) 会則の改定(13条)および「鳥居基金」の内規の改定について

日本地球化学会役員選出細則第8条では，「評議員は3期連続選出されない」と規定されていたが，これまで，会長委嘱の評議員のなかに，第8条に抵触した場合があった。そこで，現行の13条「会務を執行するための幹事若干名をおく。幹事は評議員の承認を経て評議員の中から会長が委嘱する。幹事は会長，副会長とともに幹事会を構成する」を「会務を効率的に執行する為に幹事をおく。幹事は評議員の承認を経て評議員の中から会長が委嘱する。幹事は会長，副会長とともに幹事会を構成する。会長は必要に応じて，オブザーバーとして幹事会に出席することを会員に要請することができる」に改訂する案が会長より提示され，了承された。

(5) 会員情報データベースの充実化について

各種受賞に対する推薦依頼等に対して，学会として迅速かつ的確に対応するために，データベースを構築し整備していくべきであるという提案が，丸岡幹事からなされた。そこで，会員名簿(my page)を中心に，各会員の専門分野・研究分野などのデータを掲載する方向で検討し，個人情報の取り扱いに充分配慮しながら，学会員の利益につながるデータベースを構築していくことが了承された。

(6) 財政問題と法人化について

財政問題 WG からのふたつの答申「GJの直接出版費を減らすために，学会側が編集権と copyright を持ち，出版社に出版権と販売権を委ねるという出版方式をとるべきである」と「学会役員選挙を web 投票とすることによって経費の削減は出来ないの で，従来通りの投票用紙を郵送するという方式を踏襲するべきである」について審議

し、了承した。法人化 WG から、「現時点で学会を法人化するメリットは見当たらないので、法人格取得を見送るべきである」という答申を受け審議した結果、法人化を見送ることとした（今後2年間は法人化しない）。ただし、法人化に向けた議論および準備は、会長主導により継続していく。

(7) 惑星科学連合大会のプログラム委員選出方法について

2011年連合大会終了後に、推薦あるいは投票により選出された委員候補者を、評議委員会においてオーソライズすることとなった。2011年連合大会のプログラム委員は、鈴木幹事、下田幹事、角皆会員。

(8) 総会議長選出方法について

形骸化した総会会場内からの選出をやめ、次期年会 LOC メンバーが議長を務めることを総会において承認するというかたちをとることとなった。

(9) 地球化学講座4巻（有機地球化学）の韓国語版出版について

韓国の地球化学研究者から、地球化学講座4巻（有機地球化学）の韓国語版を出版したい旨の意向が同巻編集責任者の石渡良志会員、山本正伸会員を通じて会長に伝えられた。商業ベースに載せないこと、著作権は学会にあることを確認したうえで、必要があれば文書を取り交わすことを条件に了承された。なお、同講座出版委員会委員長の松久幸敬会員および出版社の了解は得られている。

2. 委員の選挙

学会賞等選考委員および鳥居基金委員の選挙がおこなわれた。

3. 報告事項

(1) 庶務（三澤幹事）

第2回評議員会にあたるメール審議4件の結果を纏めて報告した。

「地球化学」pdf 版の公開について（1968年から2004年までの論文・総説をpdf化し、学会HPからダウンロードできるようにする）審議し、承認した。

財政問題 WG からの提案（今後科研費の申請はおこなわない、出版社にGJ出版およびその販売を委託する、そのために、編集権と著作権は学会側という条件で、出版社各社と話し合いを始める）を審議し、承認した。

学会賞等選考委員会（鍵委員長）から各賞授賞候補者の推薦をうけて審議し、承認された。

GJ論文のDOI付与を迅速化するために、CrossRefのDOI付与サービスから離脱することについて、審議し、承認した（CrossRef全体からの離脱は、文献検索に該当しなくなるなどデメリットがあるので、DOI付与サービスからのみの離脱が可能かどうか問い合わせる）。

はやぶさ地球帰還に対する声明文（会長名）を公表（6月14日）した。GJ賞楯

を作製した。ゴールドシュミット会議での授賞式へ楯を手配し、またドイツへ送付した。柴田賞、学会賞、奨励賞受賞者に通知し、授賞式にむけて賞状とメダルを手配した。育志賞学会推薦の応募書類作成をおこない、学振へ申請書を送付した（1件推薦 / 1件応募）。第2回鳥居基金による国内研究集会助成：火山性流体討論会（角野浩史）に通知書を送付した。

（2） 会計（谷水幹事）

2010年8月31日までの会計状況を報告した。

2009年会計決算（案）について：松久監事による監査が済んでいる。収支は、約40万円の赤字である。前回の幹事会報告から、名簿作成費および業務委託費がかなり増加している。2008年と比べると、会費収入が15万円減、科研費出版助成が40万円減である。

2010年中間報告（案）（7/31までを反映）について：支出は概ね昨年と同額である。会費収入は、前2年間と比べて約35万円減。出版助成は、60万円減である。

2011年予算（案）：収入については、2010/7/31時点の総会員数から単純に額を算出している。科研費出版助成は、2010年度の320万円から290万円（内定額）に減額される予定。支出については、会議費、電子化経費を2010年度支出よりも減額してある。収支は、現状で85万円の赤字。幹事経費の精査を進める予定である。

鳥居基金とゴールドシュミット会議基金：鳥居基金は、1件採択、残予算は258万円。ゴールドシュミット会議協賛金の今年度請求書類は未着であり、現時点で同基金に増減はない。広島LOCより、2009年度年会余剰金からゴールドシュミット会議基金へ65万円の入金があり、残予算はおよそ188万円である。

（3） 会員（丸岡幹事）

会費未納者に対して、6月25日付で未納会費督促状（手紙）を送付した。内訳：1～2年目の未納者が128名、3年目の未納者が19名（これで未納の場合には除籍とする）、海外の未納者が11名（このうち2名は3年目未納者）、計158名。国内3年目未納者のうち2名、国外1名が督促請求後に支払いがあり、現在残り18名（国外1名を含む）が未納の状態である。

【退会】

（3月）

（一般正会員）

8281038 垣内正久 2010/3/8 逝去

（4月）

（学生正会員）

9 2 8 2 5 2 8 柴田直弥
(5 月) なし (6 月) なし (7 月) なし (8 月) なし

【会員種別変更】

(2 月)

9 2 8 2 4 3 8 金子雅紀 学生正会員から一般正会員へ
9 2 8 2 5 7 8 堀 真子 学生正会員から一般正会員へ
9 2 8 2 5 8 5 江端新吾 学生正会員から一般正会員へ

(4 月)

2 2 8 0 3 9 8 能田 成 一般正会員からシニア正会員へ
7 2 8 0 8 0 9 乗木新一郎 一般正会員からシニア正会員へ
8 2 8 2 2 2 0 北田幸男 学生正会員から一般正会員へ
9 2 8 2 4 0 3 奥沢和浩 学生正会員から一般正会員へ
9 2 8 2 4 5 2 吉村俊平 学生正会員から一般正会員へ
9 2 8 2 5 7 5 藤原早絵子 学生正会員から一般正会員へ

(5 月)

9 2 8 2 4 1 0 小竹翔子 学生正会員から一般正会員へ

(6 月) なし

(7 月)

9 2 8 2 5 8 6 中尾武史 学生正会員から一般正会員へ

(8 月)

9 2 8 2 4 8 8 菊池麻希子 学生正会員から一般正会員へ

【入会】

(2 月)

(正会員)

9 2 8 2 6 5 1 SOHN KEE SEOK
9 2 8 2 6 5 2 JO HYUN JA
9 2 8 2 6 5 3 鷓野 光 ウノヒカル
9 2 8 2 6 5 4 柘植研一 ツゲケンイチ

(3 月)

(正会員)

9 2 8 2 6 5 7 並木健二 ナミキケンジ
9 2 8 2 6 6 1 吉川知里 ヨシカワチサト

(学生パック)

9 2 8 2 6 5 9 河野麻希子 コウノマキコ

(4月)

(正会員)

9282617 町田嗣樹 マチダシキ

9282665 廣田明成 ヒロタアキナリ

(学生パック)

9282658 濱崎 浩 ハマサキヒロシ

9282662 横山由佳 ヨコヤマユカ

(学生正会員)

9282663 中村明博 ナカムラアキヒロ

9282664 安齋博哉 アンザイヒロヤ

(5月)

(正会員)

9282672 荒井朋子 アライトモコ

千葉工業大学惑星探査研究センター

9282673 瀬口真理子 セグチマリコ

応用地質株式会社エネルギー事業部技術部

(学生パック)

9282666 片岡良輔 カタオカリョウスケ

名古屋大学大学院環境学研究科地球環境科学専攻 地球化学講座

9282667 伊藤由喜 イトウユウキ

名古屋大学大学院環境学研究科地球環境科学専攻 地球化学講座

9282668 城森由佳 ジョウモリユカ

名古屋大学大学院環境学研究科地球環境科学専攻 地球化学講座

9282669 太田祥宏 オオタヨシヒロ

東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻 大気海洋研究所

9282670 磯山陽子 イソヤマヨウコ

大阪市立大学大学院理学研究科生物地球系

(6月)

(正会員)

9282566 森下知晃 モリシタトモアキ

金沢大学フロンティアサイエンス機構

9282674 三好雅也 ミヨシマサヤ

京都大学大学院理学研究科付属地球熱学研究施設

(学生パック)

9282671 高橋幸士 タカハシコウジ

北海道大学大学院理学研究科自然史科学専攻 地球システム進化研究グループ

ブ

9 2 8 2 6 7 5 ヴ ティ ジュウ フオン
京都大学化学研究所水圏環境解析化学研究領域

9 2 8 2 6 7 9 西本礼香 ニシモトアヤカ
上智大学大学院理工学研究科

9 2 8 2 6 8 0 深井 恵 フカイメグミ
上智大学大学院理工学研究科

9 2 8 2 6 8 1 松本祐介 マツモトユウスケ
上智大学大学院理工学研究科

(7 月)

(正 会 員)

9 2 8 2 6 9 2 山本真也 ヤマモトシンヤ
北海道大学低温科学研究所

(学 生 会 員)

9 2 8 2 6 8 3 中嶋勇輔 ナカシマユウスケ
京都大学大学院理学研究科化学専攻 水圏環境解析化学研究室

9 2 8 2 6 8 7 市川寛之 イチカワヒロユキ
上智大学大学院理工学研究科理工学専攻

(学 生 パ ッ ク)

9 2 8 2 6 7 8 吉村寿紘 ヨシムラトシヒロ
東京大学新領域創成科学研究科自然環境学専攻

9 2 8 2 6 8 4 吉田知紘 ヨシダトモヒロ
東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻

9 2 8 2 6 8 5 森島 唯 モリシマユイ
京都大学大学院理学研究科化学専攻 水圏環境分析化学分科

9 2 8 2 6 8 8 関谷朋子 セキヤトモコ
学習院大学大学院自然科学研究科化学専攻村松研究室

9 2 8 2 6 9 1 今井崇暢 イマイタカマサ
東京工業大学大学院理工学研究科地球惑星科学専攻

(8 月)

(正 会 員)

9 2 8 2 6 9 8 有山 薫 アリヤマカオル
財団法人日本穀物検定協会東京分析センター研究開発グループ

(学 生 パ ッ ク)

9 2 8 2 6 8 9 森脇絵美 モリワキエミ
九州大学大学院理学府地球惑星科学専攻

- 9 2 8 2 6 9 3 窪田 薫 クボタカオル
 東京大学大気海洋研究所海洋底科学部門
- 9 2 8 2 6 9 4 尾崎和海 オザキカズミ
 東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻
- 9 2 8 2 6 9 6 岡林識起 オカバヤシサトキ
 東京工業大学大学院理工学研究科地球惑星科学専攻
- 9 2 8 2 6 9 7 山崎香奈 ヤマザキカナ
 東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻 地殻化学実験施設

- 9 2 8 2 7 0 1 村井彰宏 ムライアキヒロ
 九州大学大学院理学府地球惑星科学専攻

日本地球化学会会員数(2010年8月31日)

会員種別	人数
一般正会員	744
学生正会員	122うち、学生パック46名
シニア正会員	65
賛助会員	10(契約口数11)
名誉会員	9
合計	950

(4) 編集

. GJ(佐野編集委員長)

2010年発行状況について: 2010年 No. 3は6月末に配布された。2010年 No. 4は8月末に配布される予定。2010年8月27日現在の編集状況について、報告がなされた。現状では、論文が受理されてからゲラ刷りが出来るまで3~4ヶ月、印刷出版されるまでに8~10ヶ月を要している。

. 和文誌「地球化学」(高橋編集委員長)

「地球化学」過去の記事の電子化について: 評議員会のメール審議を受けて、CiNiiと連絡を取りながら進行中である。直近2年間については、会員のみオープンアクセスとする方針である。現在、会員の確認方法を検討中である。

2010年 Vol. 44, No. 3の掲載予定: 報文1報, 企画総説「地球化学の最前線」1報, 博士論文抄録2報。

新企画として、「地球化学の最前線」開始1ページ目掲載のロゴ(現在の地球化学が未来に向かって突き進んでいくイメージ)を作成した。

2010年 Vol. 44, No. 4特集号「有機物・微生物・生態系の地球化学」(編集: 高野淑識, 沢田健): 8編の論文・総説が集まり, 3編を受理, 5編が審査中であ

る。

特集号として「アストロバイオロジー」(提案者：藪田ひかる)の提案があり，2011年 Vol. 45, No. 4をこれに充てることを決定した。藪田氏には，特別号の編集委員を依頼した。今年度の「有機物・微生物・生態系の地球化学」や昨年度の「太陽系起源研究の新展開」と分野が似ているという懸念があったが，会員からの提案であることを尊重して，上記に決定した。

その他，「地球化学」の印刷部数を，Vol. 44, No. 3より250部削減することとした。現状1250部 1000部。内訳：テラパブ：60部，編集長(高橋@広大)：10部，ニュース担当(谷本)：5部，会員+国際文献：925部。

「地球化学」Vol. 44, No. 2に落丁があることが判明した。具体的には，P. 63~67が上下さかさまになっているものについて，7件の報告があった。メールニュースにより会員に落丁をアナウンスし，交換依頼があった2件について，電算印刷より正常なものを発送した。

・ニュース(谷本幹事)

ニュース電子メール版の配信。2010 No. 84~122まで，合計39件のメールニュースを配信した(8月27日現在)。ニュースレターNo. 201を「地球化学 Vol. 44, No. 2」巻末で発行した(6/25)。ニュースレターNo. 202の発行予定(8月末発行予定)。2010年度日本地球化学会年会のお知らせ【立正大学福岡孝昭】学会からのお知らせ2010年ゴールドシュミット国際会議(6/13~18)報告【広報幹事下田玄】研究集会などのお知らせ山岳地域における大気化学・物理シンポジウム(6/7~11)参加報告【環境研谷本浩志】院生による研究室紹介 No. 17 気象研究所地球化学研究部 第一研究室・第二研究室(松枝秀和室長・石井雅男室長)【気象研笹野大輔】書評「湖水爆発の謎を解く カメルーン・ニオス湖に挑んだ20年」日下部実【東京大学長尾敬介】2010年度日本地球化学会年会プログラム【立正大学福岡孝昭】

(5) 将来計画委員会出版WG(吉田副会長，高橋幹事)

財政問題WGの答申内容を確認した。新たに刊行されるJpGUのE letter誌に関する情報を共有し，GJとの競合への対応を検討した。また，GJの将来像について，議論がなされた(オープンアクセスやアジア諸国との連携も視野に入れる)。夜間集会において，GJの現状を紹介し，将来像について議論することとなった。

(6) 広報(鈴木幹事)

学会HPに「会員の研究成果」ページを開設するとともに，学会員の最新著書の紹介，学会各賞・鳥居基金の受賞者紹介，学会の様子を表す写真なども掲載し，会員活動の普及や地球化学の啓蒙に努める。Goldschmidt2010に間に合わせるために，パンフレットの追加印刷をおこなった。学会HPのバナー広告は，クライアント不足が続いている。講師派遣事業は，旅費の手当が不可欠なため，スポンサー探しを継続すると

ともに、学会からの援助も検討してほしい。

(7) 企画(鍵幹事)

2011年度の年会は、南川会員を中心に北海道大学で9月に開催する予定である。2012年度の開催地は、必ずしも首都圏に限定せず、交渉をすすめる。2010年度年会では、ポスター賞に加えて、学生会員の口頭発表賞も設けることとなった。

年会準備状況：昨年度、一昨年度と同様に、セッション制(21セッション)を採用し、プログラムを運用する。日程が海洋学会と完全に重なり、海洋化学関係の会員の多くが不参加となった。口頭発表が213件、ポスター発表が84件、受賞講演が3件である。LOC、庶務幹事、企画幹事の役割分担と連携が充分でなかった(たとえば、受賞講演者への講演依頼、座長の依頼について、公開講演会の科研費申請について、名誉会員への年会参加案内について)。来年は、LOC、庶務幹事、企画幹事が連携し、これらの事柄について充分留意する。

(8) JPGU 教務検討委員会および地学オリンピック(瀧上評議員)

JPGU 教務検討委員会は、地学教育(地球科学分野)に関わる解説書の作成や各種提言のとりまとめをおこなっていることが報告された。2012年につくば市において開催される第6回国際地学オリンピック日本大会の概要が紹介され、学会として協賛することが了承された。

(9) CST 養成拠点構築事業(横浜国立大学)への連携(鍵幹事)

横浜国立大学を含めた合同プロジェクトとして、新しい教員養成プランが立ち上がったことが報告された。理科離れや教育スキルの低下を防止するために、日本地球化学会が本事業に連携していくことを確認した。

(10) 世界化学年2011への取り組みについて(吉田副会長)

学会としての事業のなかで世界化学年の主旨に沿ったものがあれば、ロゴ等を使用し積極的にアピールしていくことを確認した。

(庶務幹事・三澤啓司)